

禅林偈頌作法入門

第一部 基礎編

第一章 概論

禅宗と文学（仏教と文学 / 仏教文学の歴史 / 禅宗と文学 / 道元禅師と詩）

偈頌の種類

仏事法語の形式

第二章 偈頌の作り方

偈頌の作り方（偈頌作法の流れ / 偈頌の決まり）

監視作法の基本（平仄 / 絶句 / 律詩 / 対句 / 四六文 / 偈頌の構造 / 付言）

第三章 実践文例集

引導法語（在家男性 / 在家女性 / 童子・童女 / 出家 / 寺院）

中陰・年回

第二部 応用編

第一章 詩語・用例集

第二章 脚に使える名言集

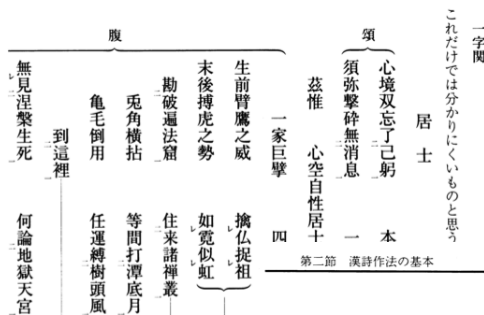
詩語の分類例

A 自然 自然 / 暦日 / 気象 / 景観 / 動植物

B 人事 感情 / 男・女 / 親子・歳 / 仕事・職業 / 生死 / 建築

C 仏教 仏菩薩・祖師 / 仏法 / 僧侶 / 寺院

第四節 引導法語の形式



一字間
これだけでは分かりにくいものと思う

第二節 漢詩作法の基本

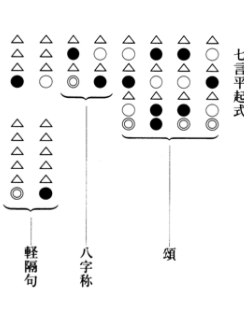
十三草 襟林針深金貼森
 十四塩 翠龕南嵐庵男参含曇談食耽藍
 十五咸 塩 園 廉 占 謙 枯 尖 添 兼 滝
 上下の区別や数字には特別の意味はない。配列の便宜上のものである。漢辞典においての四声の記号と組み合わせると表記していることが多い。本書においては韻を「上平二支」と表記することにする。

今、数字には特別の意味がないと書いたが、配列そのものには意味がある。実は類似したもの同士がグループになるように配列されているのである。なぜそのようなことが行なわれたかといえば、通韻を示すためである。通韻とは、本来同一の韻の語で押韻することを近いで代用すること。たとえば、下平五歌の語の代わりに下平六麻の「蛇」を使うがごとく左に通韻できる範囲を示しておく。線で囲まれたグループが通韻できる範囲である。

一東
二冬
三江

第二章 偈頌の作り方

第二章 偈頌の作り方



最後に今まで述べてきたことに基づいて、偈頌の形式を決めてしまおうというよりは好ましいさまざまな形ができるはずなのである。しかし、初と思つて、山口晴通師の「詩偈入門」に掲載された引導法語の形式と比較参照していただきたい。

六 偈頌の構造

蘭陵美酒鬱金香
 玉腕盛来琥珀光
 但使主人能醉客
 不知何処是他郷
 (蘭陵の美酒、鬱金香、玉腕盛り来たる
 町れり也かほれ他郷なると。)

客中行 李白

灰起式
 △●○○○○○
 △○○●○○○
 △○○○●○○
 △○○○○●○
 △○○○○○●
 △○○○○○○○

第一章 詩語・用例集

第一節 引導法語

海外風広見聞 露堂堂底作略
 手中大容事業 活潑潑地機輪
 (海外風に見聞を広む、露堂堂底の作略、手中大いに事業を容る、活潑潑地の機輪。)
 なお、教育家・医者・農業経営などを職業とする者に対する法語は、文例4以下を参考にされたい。

(1)「蜀地」に同じ。まっしぐらに、たちまちにの意。
 (2)「水自竹辺流出冷 風従花裏過来香」は「禅韻句集并苗田」などに出る言葉で、脚によく使われる(文例2参照)。

【文例4】

教授多年従育英
 一心千古只忠誠
 遽然白玉楼中去
 空聽青燈夜雨声

茲惟 新婦元 (戒名) 靈位

(教授多年、育英に従う。
 一心千古の忠誠。
 遽然白玉楼に去る。
 空しく聴く青燈夜雨の声。
 茲に惟れば、新婦元 (戒名) 靈位

萬善三空 拓無相心地
 精進一道 計子孫余慶
 家運興隆 善因善果修善法
 社会誘掖 即心即仏馳令名

夙植善根福田 業一生記
 常業雷苗禪苑 愛上品香
 接人忠信温良 業績顯著
 修己慈悲孝順 家風隆昌

豁達明朗 任公無偏無党
 温厚篤実 接人有信有婦
 清廉潔白操持 其德致厚
 勤儉自強志氣 其功自成

海外風広見聞 露堂堂底作略
 手中大容事業 活潑潑地機輪

(一) 在家女性
 作福成母耕福田 (姉と作り母と成って福田を耕す)

(萬く三空を慕いて、無相の心地を拓し、一道に精進して、子孫の余慶を計る)
 (家運を興隆して、善因善果善法を修す。社会を誘掖して、即心即仏令名を馳す)
 (夙に善根を福田に植えて、一生の記を築き、常に雷苗を禪苑に養って、上品の香を受す)
 (己に接すれば忠信温良、業績顯著。人に接すれば慈悲孝順、家風隆昌)
 (豁達明朗、公に任じて偏無く党無し、温厚篤実、人に接して信有り婦有り)
 (清廉潔白の操持、其の徳厚きを致し、勤儉自強の志気、其の功自ずから成る)
 (海外風に見聞を広む、露堂堂底の作略。手中大いに事業を容る、活潑潑地の機輪)